

●秋の中島千波展

N A K A J I M A C H I N A M I

なか じま ち なみ し ごと

# 中島千波の仕事

いろいろずかん

## 采図鑑

令和8年 2026.10.10<sup>[土]</sup> — 令和9年 2027.2.23<sup>[火・祝]</sup>  
午前9時～午後5時 ※休館日：10月11月を除く水曜日・年末年始（12月29日(火)～1月3日(日)）

ギャラリートークがあります。

〈初日〉10月10日<sup>[土]</sup> 午後2時～  
その後、庭で、ティーパーティーがあります。

「おぶせミュージアム・中島千波館と小布施の里」という本が、34年間求龍堂の倉庫に眠っていました。

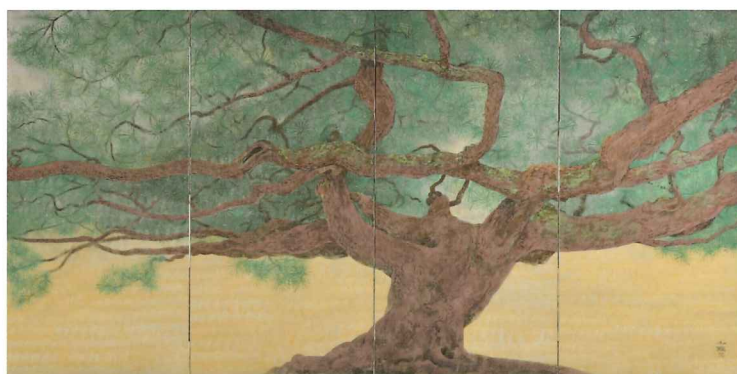
「小布施ってどこにあるの？」空から眺めた日本地図。小布施は日本のまん中あたり、

長野県の北部に位置します。人口わずか一万二千人たらずの長野の小さな山里です。その町に、びっくり、美術館が出来たのです。

この本は、小布施の歴史や文化や料理と、そして、中島千波の「若い画家の仕事」もたくさん載っています。

初心に戻って、これからも、「良い仕事」を産み出して下さい。期待しています。

下記の4点の作品を寄贈致します。10月10日から始まる「秋の中島千波展」で、おひろめさせていただきます。



ようこう  
影向の松 星住山 善養寺

樹齢は600年以上。東西28m南北32mに伸び、繁茂面積は現在日本一といわれています。

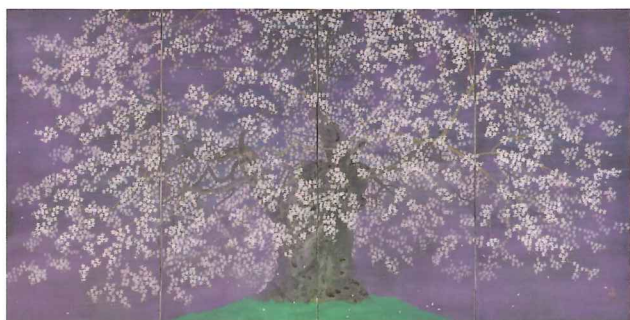
「影向」とは、神仏が機縁に応じて、この世に姿をあらわすという意味で、その偉容が神仏のように荘厳であることからこの名が付けられました。

2011年には、国の天然記念物に指定されました。  
(東京江戸川区にあります。)

ぜんよう せい しょう とう まつ  
善養寺 影向の松 2025年(80歳)  
四曲一隻屏風 171.0×342.0



せい か れん げ ず  
清夏蓮華図  
2025年(80歳)  
四曲一隻屏風  
171.0×342.0



こうりん じ しょうかわぎくら  
光輪寺の荘川櫻  
2025年(80歳)  
四曲一隻屏風  
171.0×342.0



たいじゅうすずみぎくら  
大樹淡墨櫻 2019年(74歳) 30F(72.7×90.9)

# 千波館

## 屏風作品を中心に。

感動すること：絵描きになろうと思った1969（昭和44年頃）大作を描くためのひとつの勉強法として、身近な花を小品で描いていました。屏風などの大きい作品は、小品をたくさん描きながら、自分の頭の中でその花なりのイメージが熟してこないと描けません。いきなり大きな作品を描くことはほとんどないですね。だから、「いつか大きな作品を描いてやるぞ」というモチーフがあると機会あるごとに取材に行き、スケッチをします。

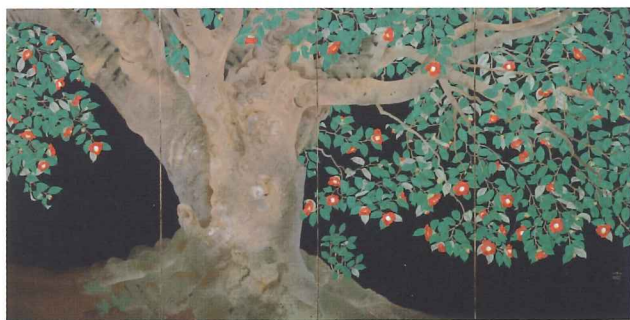
対象となる花や木を見たときにどれだけ感動できるかということが、絵描きにとって大事なことだと思います。……千波



うすみづぐら  
淡墨桜 1994年(49歳) 53.0×72.7



せいきゅう み はる たきぐら  
清宮三春の瀧桜 2023年(78歳) 100F(130.3×162.1)



たき ぜんえん  
滝の千年樺 2010年(65歳) 四曲一隻屏風 172.0×341.0



よしたか おおがくら  
吉高の大桜 2020年(75歳) 四曲一隻屏風 171.0×342.0



ふじ せつは  
不二雪嶺 2023年(78歳) 四曲一隻屏風



じれい うすみづぐら  
樹霊淡墨桜 1993年(48歳) 四曲一隻屏風 175.5×340.0



おの かのんのん  
小野の観音桜 2020年(75歳) 四曲一隻屏風 171.0×342.0



ほうこく じ  
報国寺の竹林 1998年(53歳)  
二曲一隻金屏風 166.2×169.8



いとうじゅん  
伊藤若冲模写 紫陽花双鶏図部分  
2011年(66歳) 絹本彩色 35.0×46.5

# 1階ロビー

寄贈して頂きました。 おぶせミュージアム・中島千波館蔵として大切にさせていただきます。  
ありがとうございました。



み はる たきざくら  
三春の瀧桜 2007年(62歳) 50P



し だれざくらん まん  
枝垂桜爛漫 1999年(54歳) 30P



しん やつぽ い し だれざくら  
晨夜坪井の枝垂桜 2001年(56歳) 40P



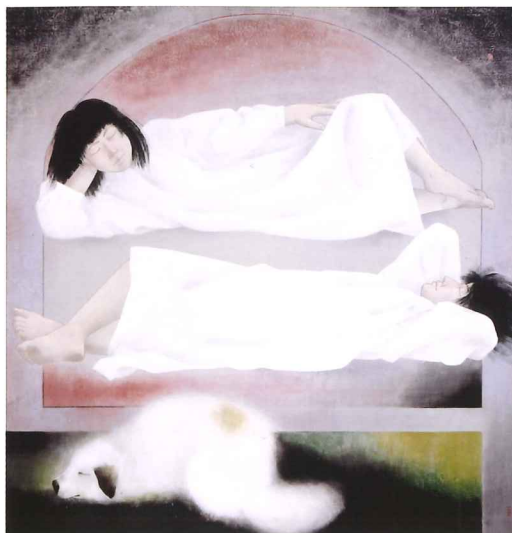
せいしん み はる たきざくら  
清晨三春の瀧桜 2003年(58歳) 40P



ふう き か (しろ)  
富貴花(白) 1998年(53歳) 20P

須坂・小林様

桜作品：4点 牡丹作品：1点を寄贈して頂きました。



愛知県・山田様

千波の出品画を寄贈して頂きました。

鎌倉に住んでいた頃、小鳥屋さんの店先で「子犬あげます」と書かれた犬がいて、通りがかった娘と女房が気に入ってもらって来ました。目の周りにパンチを受けたような毛色があったので、当時はやっていた映画から「ロッキー」と名付けました。犬っていつも寝ているイメージなので『眠』のシリーズに登場させました。ロッキーはとても性格が良く穏やかな犬で、良いモデルになってくれました。

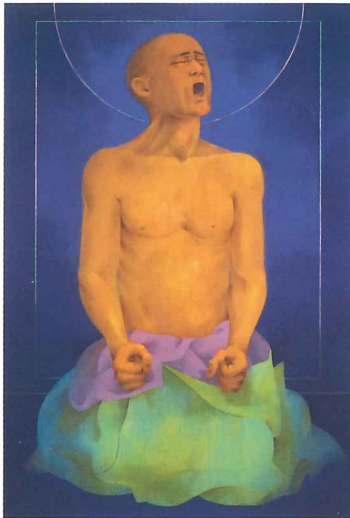
みん  
眠\* '88-3 1988年(43歳) 1000×1000  
第43回 春の院展(出品作)

# 第1展示室

## 人間とは何か《衆生》《形態》《眠》

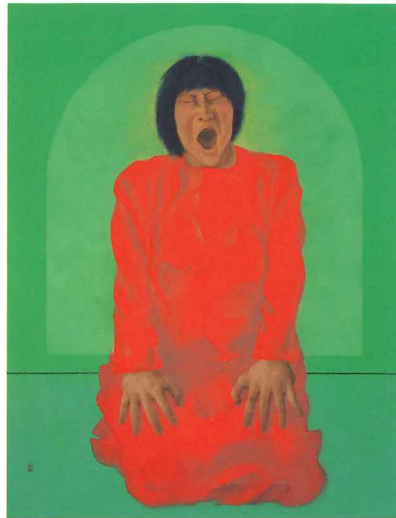
「中島千波の人物画」一草雑奈津子（人物図鑑より抜粋）「衆生シリーズ」で人間の在り様について問うた千波は、次に「形態シリーズ」で造形的な方向へ向かった。描線についても研究した。しかしこのあまり評判の良くなかったシリーズの後、判ってくれないならば眠ってしまえとばかりに「眠シリーズ」に向かったのである。「眠シリーズ」の次に来たのが、再び目を見開いた「空シリーズ」であった。

1975年  
30歳



衆生 117.0×80.5

《衆生》は、生きているものたちの総称です。この絵は、法隆寺の五重塔の塑像群の中にある衆生達が、「釈迦が亡くなって、悲しんでいるところ」をモチーフに、父親をモデルにして描いた一番最初の「衆生シリーズ」です。



'75-1-あ 116.5×91.0

学生時代は、戦争をテーマに描いていて、そのテーマの中味は、ベトナム戦争で、それをひき起こす人間を内面的に表現しようと思った。「あ」と「ん」は、物事のはじまりと終り。「生と死」



'75-1-ん 116.5×80.0

仏教用語である「衆生」は、「生きとし生ける者」生命あるすべての者を言いますが、狭義では「迷いの世界にある生類」ともいうそうです。人間が叫んだり、悩んだりする図柄を描いています。そして、色の使い方は、人物がきわだつように、対称的な2色で表現した方が、わかりやすいのです。

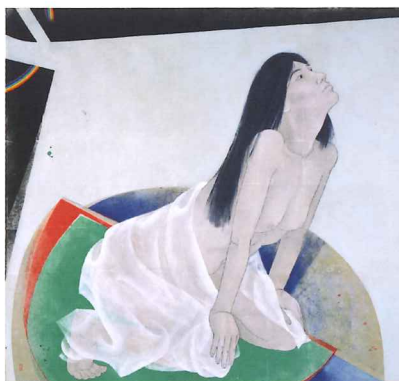
1979年  
34歳



衆生・聴 176.0×110.0

1979年2月、今日の日本画 第5回山種美術館賞展（山種美術館）に、《衆生・視》が、第5回山種美術館賞優秀賞を受賞。5月に、昭和世代日本画展に、《衆生・聴》を出品した作品です。《三猿》のことわざからとって、みざる、言わざる、聞かざるの発想を得て描いている。「聞きたくないことを、人は聞いていたり」している。

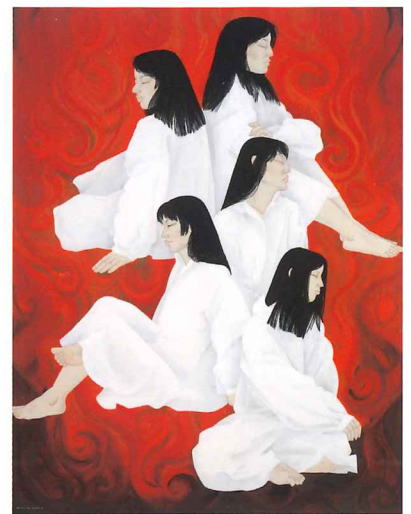
1984年  
39歳



形態\* '84-3-女 95.0×100.0

形態：「衆生シリーズ」で、人間を描いていると、絵画の原点に、もう一度戻り、「人間の体」の仕組みを学び直そうと思いました。裸の女性を構成的に表現し、色と形を純粹に追求しました。

1991年  
46歳



眠\* '91-8-炎 220.0×165.0

眠：形態シリーズが、評判が良くなかったのもう、いやになって、「眠ってやろう」と「眠シリーズ」が始まりました。（実際は寝てはいない、目をつぶっているだけ）質問：なぜバックが炎なのですか？答：不動明王のごとく、煮えたぎって、怒っている様子を表現しています。

## 人間とは何か《空》《identity》《existence》

「衆生」もそうだが、「空」も仏教用語である。

千波は人間の内面に迫ろうとしたのである。精神的存在としての人間を問うたのである。「空即是色 色即是空」という言葉は、かつて、植木等が歌う流行歌にもなったくらいであるから、日本人にはなじみの深い言葉である。しかしなんだか良く判らない言葉である。

でも空=色であり色=空ならば、すべて有であり、すべてが無であるというような意味だろうか。中島千波は一生懸命考えたのだと思う。

「空」とは何か? 「空」とはいかに表現すべきか? と。おそらく答えはあるまい。しかし彼は「中島千波の空」へと向っていった。

そこで「identity」へと方向転換したのである。

1996年

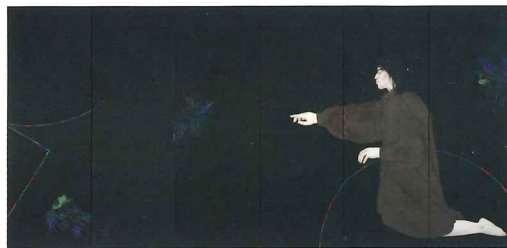
51歳



空\* '96-10-相  
二曲一雙屏風 171.0×175.0



空\* '96-10-相-L  
六曲一雙屏風左隻 175.8×365.0



空\* '96-10-相-R  
六曲一雙屏風右隻 175.8×365.0

眠りから覚め、仏教理念に基づき、人間の精神性を追求する「空」へとテーマが進みました。

暗黒の中に、人間が存在しているところを描いています。

2006年

61歳



アイデンティティ  
identity\* '06-9-whirl 四曲一雙屏風 180.0×362.4

identity(アイデンティティ)は、自分自身をみつめて「自分ってなんだろう」自分は、ぐるぐるまわったうずの中にいる。

2010年

65歳

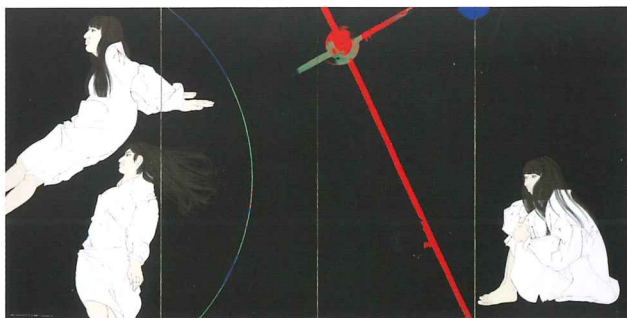


在\* '10-9 四曲一雙屏風 172.0×342.0

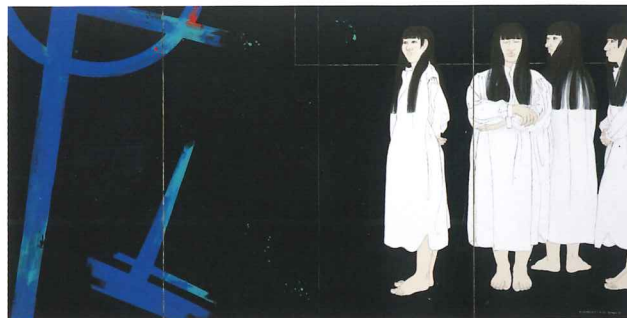
存在：私たちが、ここにいることは何だろうか? を考えている。

2011年

66歳



エクジスタンス  
existence\* '11-9-son(存) 四曲一雙屏風左隻 172.0×342.0



エクジスタンス  
existence\* '11-9-zai(在) 四曲一雙屏風右隻 172.0×342.0

existence\* '11-9-son(存) existence\* '11-9(在) イグジスタンスは存在、実在を意味しています。「存在」をテーマに、私たちがここに居ることは何なのだろうか? ということを描くシリーズです。作品の中には、中国より渡ってきた象形文字の「存」と「在」という文字を取り入れ書き込んでいて、一見文字とは見えないのですが、これは祭祀的な表現であり、具体的な人物をミックスして構成しています。

(左の屏風の右側の人間が存の㊦です。右の屏風、左、㊦と書いてあります)

そして、私は絵を描き続け、残し続けることの存在理由をも解き明かしたいと思っています。

## 人間とは何か 《mumyo (無明)》《無常》

2006年のidentityで、彼の自画像は画中の人物の膝の上にそっと置かれている。やっと居場所を得たのであろうか。しかしその人物が見つめる先には、渦が巻き4人の人物がその周りを回る。まさにサブタイトル whirlのとおりである。中島千波の作品を完全に理解するのは難しい。そして、又あらたなテーマが持ちあがってきたのである。2010年、中島千波は《在\*10-9》を発表した。

2017年

72歳



existence→mumyo (無明)\* '17-9-L 四曲一双屏風左隻 171.0×342.0



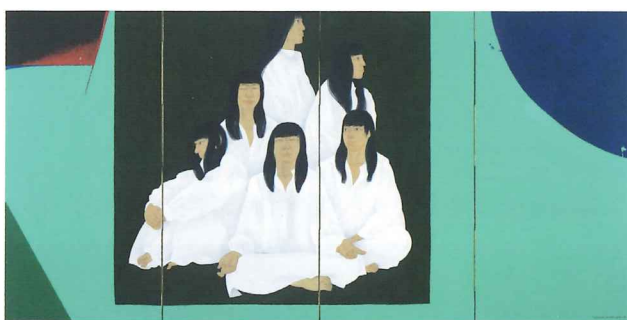
existence→mumyo (無明)\* '17-9-R 四曲一双屏風右隻 171.0×342.0

2019年

74歳



mumyo (無明)\* '19-9L 四曲一双屏風左隻 172.0×342.0



mumyo (無明)\* '19-9R 四曲一双屏風右隻 172.0×342.0

[2017年・2019年] 象形文字が左隻には百八と、右隻には群という字が書いてあります。<sup>むみょう</sup>無明とは、仏教用語で、無知、迷いの意味で、煩惱から離れられない状態です。これを人々が克服すれば、もう少し良い世の中になるのでは？

制作風景は、2018年1月7日、日曜美術館で放映されました。

2021年

76歳



むじょう 無常\* '21-8-L 四曲一双屏風左隻 171.0×342.0



むじょう 無常\* '21-8-R 四曲一双屏風右隻 171.0×342.0

《無常》は、仏教で、一切のものは、生じたり、変化したり、滅したりして、一定のままではない。常に変化している。

この絵は、右は、にげようとして、左はやみにひっぱられている。

## 2階ロビー

### 木版画・版木・順序摺り

**木版画** 版の材料に木を用いた版画で、凸版を代表する最も古くから使われている技法。  
多色摺りのため、もっと高度な技術を必要とし、基本的には、ひとつの色に対してひとつの版木を作る。



樹霊淡墨桜 1998年 42.5×84.5

**彫る** 原画を色分けし、数多くの板を使って多色摺りの木版画を完成させるかを決めるのは、彫師の腕の見せどころとなります。摺りの効果も、いかに正確に原画を彫り分けるかにかかっています。

**摺る** 樹霊淡墨桜の彫板は45版。この彫板を使って重ね摺りを行い、作品に奥行と厚味を表現するため、摺り度数は84回となります。彫師の意を受けて、原画の趣きを最大限に表現する摺師の仕事は重大です。

京都の芸艸堂より木版画の順序摺り一式（版木も）を寄贈して頂いたので、今回展示致します。

日本では木版画といえば浮世絵版画を連想する人は少なくないはずです。

浮世絵版画はまず版元があり、絵師・彫師・摺師が専門的な技術を結集して作られたものです。各々の高度な技術の結晶は木版（主に桜材）のもつ温かみが特徴で、世界に類を見ない印刷方法の一つとして広く理解されています。

木版画には、美しい線を描く絵師が必要でした。この度、パリで開かれる中島千波先生の個展に制作されたヴィスクドールです。版木、順序刷りも展示します。（アダチ版画研究所）18版・28摺



ヴィスクドール (ピンク) 1996年  
51.5×33.3 120部



ヴィスクドール (きいろ) 1996年  
51.5×33.3 120部



ヴィスクドール (みずいろ) 1996年  
52.3×36.1 120部

## 第2展示室

### 金屏風

金屏風を最初に描いたのは、1995（平成7）年（50歳）パリ・エトワール三越の「中島千波の世界展」で発表した「久遠寺の瀧櫻」です。フランスの個展のために、日本的な表現は金屏風であると考えました。そして、たくさんの金屏風の作品が増えました。



ふうき かんえん  
富貴華宴 2000年（55歳） 絹本彩色 四曲一隻金屏風 171.0×350.0

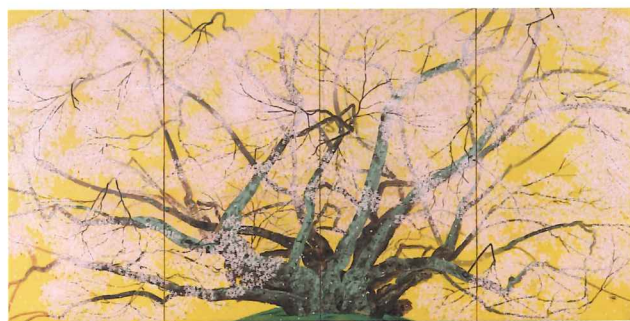
金屏風で描いているというのは、少々、アカデミックな感じでエキゾチックなところをねらっているようだけれど、そういう意味ではなくて、もうちょっと装飾性というか、そういうものが絵画のなかでも大切なものであり ほんとうに美しい日本の絵を描きたいのです。



しんち はなしょうぶいち  
神池花菫浦I 2005年（60歳） 絹本彩色 四曲一隻金屏風 171.7×340.7



けんらんせんがうがたあさががす  
絢爛扇形朝顔図 2020年（75歳） 絹本彩色 四曲一隻金屏風 172.0×343.0



すざかりじんじゃ しんたいざくら  
素桜神社の神代櫻 1996年（51歳）（長野県）  
（約1200年） 絹本彩色 四曲一隻金屏風 175.0×340.0



しゅうき こうようず  
秋季紅葉図 2010年（65歳） 絹本彩色 四曲一隻金屏風 172.0×341.0



中島 千波

NAKAJIMA  
CHINAMI

1945年10月21日 長野県小布施に生まれる。  
東京藝術大学（日本画専攻）大学院修了。  
1992（平成4）年10月22日、47歳の時に小布施町立おぶせミュージアム・中島千波館が開館する。  
収蔵作品は、本画、デッサン、版画など、2000点が収蔵されている。  
現在：東京藝術大学名誉教授、日本美術家連盟理事長、  
おぶせミュージアム・中島千波館名誉館長、  
小布施町名誉町民

主催：おぶせミュージアム・中島千波館／小布施町教育委員会 協力：有限会社 空  
後援：信濃毎日新聞社／朝日新聞長野総局／読売新聞長野支局／毎日新聞長野支局／産経新聞社長野支局／  
時事通信社長野支局／共同通信社長野支局／SBC信越放送／NBS長野放送／TSBテレビ信州／  
abn長野朝日放送／長野市民新聞社／長野日報社／須坂新聞社／北信ローカル・りふれ／株式会社  
Goolight／FM ぜんこうじ／（公財）信毎文化事業財団／（公財）八十二文化財団



【アクセス】 上信越自動車道 信州中野I.C.より車で10分  
上信越自動車道 小布施スマートI.C.より車で5分  
長野電鉄小布施駅より徒歩12分

料金 一般 800円 大学・高校生 400円  
（中学生以下無料）小布施町民は無料

※障がい者手帳、療育手帳等をお持ちの方は半額、20名以上の団体1割引



おぶせミュージアム・中島千波館

〒381-0201 長野県上高井郡小布施町大字小布施595 TEL.026-247-6111